

五 人物埴輪腕の製作技法について

瓦塚古墳出土の人物埴輪は、腕の製作技法が中空（I類）と中実（II類）の二つに分かれる。両者を仔細に検討（第2表参照）すると次のような差がある。

1 中空製作のもの（I類）は掌の表現が忠実で、その全てが粘土紐で人差指から小指までの四指を別々に製作（aタイプ）している。これに対して中実製作のもの（II類）は掌の表現が簡略で、四指を一体に作り、線刻で指を表現するもの（註1）（bタイプ）と全く指を表現しないもの（cタイプ）とが存在する。

2 中実製作のもの（II類）はすべて赤褐色系の色調で、焼成が良いのに対して、中空製作のもの（I類）は色調にバラエティーがあり、乳白色や淡褐色などの白っぽいものが中心をなしており、焼成にも差がある。

3 I類は外面調整（掌を除く腕部）にハケメを用いるか、ハケメの後にナデを加えるが、最終的にハケメの残るものが多い。これに対してII類は外面調整にナデだけを用いるか、ハケメの後に強いナデを加えることによつて、ハケメをきれいに擦り消している。

中空製作のものを注意して観察すると、内面の中空部分は凹凸がなく、器面に沿つて擦痕、条痕をとどめるものがある。このことは棒状工具を利用して製作されたもので、粘土紐の巻上げや板状の粘土をまるめて中空に製作されたものでないことを示している。さらに、腕の付け根の屈曲部分で穴の断面が歪む場合が認められることから、棒を抜きとつた後で、本体を曲げて腕の形に成形しているものと考えられる。棒を芯として使い、これに粘土で

肉づけを行つて腕の粗形を作つたのか、円柱状の粘土に後から棒を差し込んで作つたかは良好な資料がなく、はつきりしない。しかし254に認められるように中空部分は手首まで及び、棒を抜き取つた後、肩部への差し込み部分を細くするために、しづつて穴をふさいでいることが観察される。この一連の技法は木芯中空技法とも呼び得るものである。

以上の事実から、棒を用いることは、体部への固定のためではなく、太い腕の部分を中空に作ることが目的であったと考えられる（註3）。このことは262に認められた座像人物の足にも共通している。焼成具合を検討すると、中実のものは焼成が良好で、色調が赤色系であるが、中空のものは軟質のものを多く含むことが注目される。つまり、窯の構造や焼成技術によつて腕を中空に製作せざるを得なかつたのではないかと推察されるのであり、腕の製作技法の差異は、それを製作した窯、ひいては工人集団の差と考えられる。

瓦塚古墳の場合は、掌の指を粘土紐で一本一本、忠実に製作しながらも焼成技術が低いために腕を中空に作らざるを得なかつた埴輪工人集団の埴輪と、焼成技術が高く、腕は中実に作るが、掌の指の表現を簡略化して作る埴輪工人集団の埴輪が同一古墳の中堤上の埴輪群の中に混在していきになる。

腕製作技法の実例を広く西日本に求めると、五世紀中葉の大坂府羽曳野市菅田白鳥遺跡（註4）と五世紀後半の大坂府高石市大園古墳（註5）では中空に製作されており、さらに六世紀前葉の和歌山市井辺八幡山古墳（註6）と大阪府高槻市星神車塚古墳（註7）でも中空式である。ところが、六世紀前葉と中葉の交る時期の東大阪市大賀世3号墳（註8）では中空式と中実式が共存し、磐井の墓の有力候補である福岡県八女市岩戸山古墳（註9）では中実式の実例が認められる。

埼玉古墳群では稻荷山古墳と二子山古墳では、中空式に製作されており、

